

アルザス史 9 米仏連合軍のアルザス解放戦闘

志村 良知

1944年から1945年にかけての冬は地球規模で厳冬であった。中部ヨーロッパは氷点下20度の低温と猛吹雪の連続だった。親の話だと日本も寒かったらしい。

厳冬の兆しの悪天候が続く1944年11月、連合軍は北海からスイスまでの長い戦線を形成していた。戦線最北部に英軍。ベルギーのアルデンヌにはノルマンディに上陸しフランス/オランダ/ベルギーと東進してきた米第5軍と7軍。それにド・ゴールのフランス第1軍。その南のルクセンブルクから北部ロレーヌにかけて米第3軍。さらにボージュの西の中部ロレーヌにはプロバンスに上陸してローヌ川沿いに進撃してきた米第6軍。最南部にはフランス第1軍の別部隊がベルフォールの地峡からスイス国境沿いにかけて布陣していた。アルザスは中立国スイスを避けてのドイツ本国南部・オーストリアへの進撃路の本命だった。

11月22日、ベルギーとフランスの国境沿いに東進するアメリカ第7軍第6軍団と連携して、北アルザスに進入していたルクレール将軍指揮下のフランス第1軍第2機甲師団がストラスブール奇襲奪回に成功した。これはストラスブールのドイツ軍守備が手薄と知ったルクレールの決断で50キロメートル以上を戦車（アメリカ製のM4戦車）が師団規模で駆け抜けるという勇猛果敢な猪突猛進だった。25日にはドイツの守備隊は降伏し、アルザスの象徴で、バ・ラン県（低地ライン県）の県庁所在地ストラスブールは解放された。

米第7軍はさらに南のアルザス平原に進出、呼応していた第6軍もボージュを越えて中部アルザス平原に進出し、ミュールーズ、タンなどいくつかの町や村を解放した。仏第1軍はスイス国境沿いに進撃しバーゼル北方でライン川に達した。しかし、独19軍の10個師団が守る「コルマールのポケット」という独軍防御線は破れず、戦線は膠着する。

12月16日、ベルギーのアルデンヌでドイツの反攻作戦「ラインの守り」が始まる。連合軍戦史では「バルジの戦い」と呼ばれるこの作戦は、東進する連合軍に開戦時の国境まで押し戻されたドイツ軍が、連合軍の兵站港であるアントワープを奪回して一気に形勢逆転しようとする壮大なものだった。しかし、分厚く援軍を繰り出す連合軍の反撃により、ドイツ軍の攻勢はベルギー中部の雪の中で頓挫、ドイツの「クリスマスはアントワープで」の意図は潰え去る。バルジ戦の敗戦で国境が危機に陥ったドイツ軍は12月31日、ベルギー東部

とアルザス北部の確保、ローリングゲン、ストラスブールとアルザス平原の奪回を目的として「北風作戦」を発動する。

連合軍にとっては、アルザスの北側、ドイツ本国から南下してくる独 G 軍集団第 1 軍の 1 2 個師団と、呼応して南から膨張してくるコルマールのポケットの独第 1 9 軍との二正面の戦いとなった。アルザス解放戦闘の最終章「コルマール解放戦闘」の始まりである。

ベルサイユ宮殿に置いたアイゼンハワーの連合軍司令部は第 6 軍団をボーージュの線まで後退させ攻撃軸を北に向けることを決意、そのため手薄になるストラスブールの放棄を命ずる。

当然であるが、ド・ゴールとルクレールはこれを拒否。アイゼンハワー対ド・ゴールのチャーチルまで巻き込んでの激論となる。結局アイゼンハワーが折れ、米軍も作戦変更して撤退中止、ストラスブール大聖堂尖塔のトリコロールは維持される。仏第 2 機甲師団は急遽合流したフランス・アルプス師団の援護も受け、町の南側からの攻撃を押し返し、コルマールのポケットへの攻撃「コルマール解放戦闘」に移る。

アルザス解放戦闘では連合軍の砲撃により多くの町や村が破壊された。前年 9 月から 1 1 月攻勢にかけてストラスブールやコルマールなどアルザスの大都市から村までを準備爆撃し、かなりの破壊や犠牲者を出して住民の反感を買っていた米陸軍航空隊は、年明けての総攻撃では悪天候が幸いしてほとんど地上に留め置かれた。もし晴天続きだったら、それまでさんざんフランスの町と村、ドイツの大都市を廃墟にし、イタリアではモンテ・カシーノ修道院さえ破壊した野蛮な米陸軍航空隊はアルザス全体をめちゃめちゃにしていたであろう。

アルザスの最後の戦いで爆撃による破壊が無かったことは文字通りの不幸中の幸いだった。このあと、日本の全ての県庁所在地と大都市を廃墟にしてしまう米陸軍航空隊は、ロマンチック街道のローテンブルクや、スイスのシャフハウゼンさえ爆撃したのである。

現在のアルザス・ワイン街道沿いの観光ワイン村には、破壊されなかった村、破壊から再建された村が混在している。リースリングの銘酒を生む「アルザスの真珠」、安野光雅画伯絶賛のリクヴィールは破壊を免れた村の一つである。コルマール防衛のドイツ軍も、幸いにもそれほど高い戦意はなく、町の北側からの侵攻にさしたる抵抗なしに撤退して行き、旧市街の 1 7 世紀の町並み、新市街の 1 9 世紀から 2 0 世紀初頭のドイツ建築群は市街戦が行われたにもかかわらず、一部の建物に弾痕を残したもののほぼ無傷であった。